
お約束研究会

土曜日の朝刊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お約束研究会

【Nコード】

N8265W

【作者名】

土曜日の朝刊

【あらすじ】

平凡でこれといった特徴もない、ありがちな設定の主人公の男子高校生。

ヒロインは主人公の幼馴染というよくある設定。友達は絵に描いたような優等生。

極めつけはクールで無口な無表情少女というどこかで聞いたようなキャラ。

そんなお約束が服を着て歩いているような彼らが“お約束”について追求する！ 第四の壁？ なにそれおいしいの？

登場人物紹介なんて無くても読める小説が理想（前書き）

といつつやっちゃうのが三流作家のサガです。

最初から見てもいいし後から設定思い出すために見てもいいです。

登場人物紹介なんて無くても読める小説が理想

佐倉裕貴 さくら ゆうき

“お約束研究会”二人目の部員。

事なかれ主義で口癖は「やれやれ」。平凡で特にこれと言った特徴もとりえもない。……というありきたりなくよくいる主人公。高校一年生。自分の設定のあまりの陳腐さにうんざりしている。

また、この小説のありがちなお約束を一番に嫌っている人物でもある。

吉村美並 よしむら みなみ

“お約束研究会”一応部長。というか、研究会を作った張本人であり幼馴染である裕貴をこの研究会に引っ張り込んだのも彼女である。

ツインテールでツンデレ、貧乳である事を気にしているというありきたりな設定だが、本人はそれほど気にしていない。目標はお約束やありきたりのない究極の小説を完成させる事。

桐山透 きりやま とう

お約束研究会員で真面目で冷静で万能。ストイックな性格で成績も優秀。スポーツ万能。非の打ち所のないよくいる優等生キャラ。

野上静香 のがみ しずか

最後の部員。無口で無表情などこかで聞いた事があるような設定の少女。たまに口を開けば的確で鋭い指摘をする。何を考えているのかわからない、端的に言えば長門ポジション。

プロローグの名のもとに設定を説明しようか（前書き）

むしゃくしゃしてやりました。反省をしてません。

小説というのもおこがましいです。ギャグ小説のつもりでやったのがこのザマです。

でも読んでくれる人がいましたら、本当にありがとうございます。

プロローグの名のもとに設定を説明しようか

こんなアホなタイトルにして釣られて読んでくれる人がいると思っただら大間違いだ -

おれはそう言いたかったね。もちろんこの小説の作者に。

いまどきどんなに奇抜なタイトルにして読者の興味を惹こうとしたって無駄だ。考える事はみんな一緒だからな。他にも似たようなタイトルがいくらでもあるわけだ。

「なにいきなり楽屋ネタかましてんのよ。つーか、あんたの愚痴っぽいモノローグなんて聞いてたら耳が腐り落ちるから話を進めてくんない」

「うるせーな。こういう小説なんだよ」

なーんて、開始から数行目でいきなり文句を言うてくる生意気なこの女。

おれの幼馴染であり、同級生である吉村美並だ。よしむら みなみ

うわっ、出たよ幼馴染。なんつうありきたりな、なんて思わないで読んでくれよ。

おれだって好きでこんな奴と幼馴染になったんじゃないぞ。作者が低脳だから幼馴染以外に気のきいた設定を思いつかなかったただだ。

少し赤みがかった茶髪のツインテールをなびかせ、顔はヒロインなんだから当たり前だろと言わんばかりに可愛らしく、貧乳を気にする幼馴染少女。

吐き気がする程に陳腐な設定だと思わないか？

「美並の設定の説明終わった？」

「お前も“説明”とか言うなまじで頼むから。これ以上この小説に

楽屋ネタを増やしたらますます低脳呼ばわりされる」

「自分がさんざんやっておいてそれ？ いいのよ、プロローグなんてちよつとかつこよさげな名前だけど、結局は設定を説明するだけだから」

「なんちゅう事言っただよお前。おれが見たところ、プロローグは何種類かに分けられるぞ」

「へー、考えてんだね一応」

「まずお前が言った“設定を説明する型”。これはファンタジーに多いから本来こういう学園モノに使われる事はあんましないんだけど……そこは作者の頭が残念って事で触れないでおく」

「他には？」

「あんま期待するような目をして訊かないでくれ。おれも適当に考えただけだから的外れなんだ、こんなもんは。強いて言うなら、面白い話を先にやっちゃう、って感じのやつかな。うまく説明できないけど」

「よくわかんない」

「たとえばファンタジーだったら、主人公が勇者になった経緯やその他の登場人物との関係、世界観の説明、そういうのを全部すつとばして、まず勇者が敵をぶつ殺すシーンから始めるんだ。そこで読者を惹きつけて、一話から改めて設定を説明するパターン」

「ふーん、なるほどね……」

「あー、あとはミステリなんかだと、被害者のモノローグだったりするよな。プロローグって。被害者が死ぬ前の生活がちよつと描写されててさ。本編に入るとそいつは殺されたり」

「あー、あるある」

まあ、今まで言ったのは本当にぜーんぶ適当に言っただけだから、あんまり真に受けられても困るんだけどな。一気に喋ったから疲れたわ。

「なにぼさつとしてんのよ。まだこの小説には説明しなきゃいけない設定がいっぱいあんでしょうが」

「うるっせーな。あんま説明説明連呼すんなよ。読んでもらえなくなるだろ。それとなく、自然に設定を説明するんだよ」

「そもそもあんた、自分の名前すら言ってないじゃん」

申し遅れました、おれの名前は佐倉裕貴さくら ゆうきです。（これでいいんだろ）

多分読者は予想してると思うが、これといった長所も特技も特徴もない平凡な男子高校生……という設定。奔放なヒロインに振り回される苦勞人……という設定。

ああ、うんざりだ、この陳腐すぎる設定。死んでもっと斬新なキヤラに転生したい。正直こうしてモノローグをやっているだけで恥ずかしいんだが。

タイトルを読めばわかると思うが、この物語の舞台となるのは……

「いやタイトル読んでもわかるわけないでしょうが」

「ちょ、うるせーよお前。モノローグに割り込んでくんない」

えー、失敬。タイトルを読めばわかると思うが、これは約束研究会のお話だ。

物語に出てくるお約束をひたすら追求して、お約束が出来るだけない究極の小説を追いつめる研究会。それがお約束研究会だ。

色んな漫画やアニメや小説を読み漁った美並が、ありきたりに嫌気がさして衝動的につくった部だ。

おれは幼馴染だからか、強制的にここに入部させられて、部長はあいつ、副部長は二番目に入ったおれ、って事になってる。

まあ、うちの高校は勝手に研究会も部もつくれないから、非公式だけど。部費も必要ないし、教室も余ってるし、誰にも迷惑かけてないし、そもそも大した活動じゃないしな。

要するに……大丈夫だ、問題ない。

って事さ。設定的には、一番いい設定を頼む、って話だが。妙な部活あるいは研究会をつくってそこで活動する話、なんてのはそれこそ、うなる程あるわけだ。それが作者にはわかってるのかね？

「さりげなく舞台が“高校”って事をアピールしたわね」

「こういうさりげなさが重要なんだよ」

もっとも説明説明連呼しちゃったからには手遅れ感が半端じゃないが。

「わざとらしいのよ」

いちいち文句が多いなこいつ。あんま固い事言わないで欲しい。しょせん“小説家になろう”のマイナー作家の書く小説のクオリティなんてこんなもんだよ。

上質な物語が読みたければ小説を買えばいいじゃん、ただし赤川郎や山田 介は除くが。

「あんた赤川さんデイスってんの？」

「だってあれは……下手なライトノベルよりライトだと思うぞ」

「別にエルだろうがライトだろうが面白ければいいでしょ。山田 介みたいになくもないのにライトなのはマズいけど……」

「ライトというより日本語じゃな……おや、誰か来たようだ」

「句点の使い方のお話。」

美並^{みなみ}が家から部屋に無断で持ち込んだノートパソコンを食い入るように睨み付けている。

ていうかそれ、おれのなんですけどね。

「ノートパソコンをそんなに睨みつけてもバナナは出てこないぞ」「わかつとるわ。ていうかあたしバナナが好きだなんて言っていないし！」

「なんか好きそうな顔して……」

言い切る前に奴の右フックがおれの顔面を襲った。

この女相手に調子にのって軽口を叩きすぎるところなる事は長年の付き合いからわかってたはずなのになあ。

「で、なにを見てたんだよ。おれのパソコンにB1エロ画像とか保存したりしないでくれよ」

「んな事してないわよ。あたしはインターネットよりも生の本で……ってそういう事じゃなくてね。小説家になろうってサイトで人気の小説を読んだのよ」

「はあん、そうなんだ。どうよ、面白かったか」

「それが全然面白くないんだこれが。ってのは言いすぎだとしても、ランキング上位の小説を読んだらどうも既視感がさあ」

「ありきたりだって言いたいわけか」

「身もふたもない言い方をするとそうなの」

そもそもこの研究会自体、ありきたりとお約束を研究するための会だからなあ。“なるう”のランキング上位の小説を読んでおくのはいい事かもしれない。

「けど美並よ。“ありきたり”な事と“王道”な事は似て非なるものだ。ありきたりな物語は見て面白くもなんともないけど、王道でも面白い物語はあるんだぜ。漫画だと、ダイの大冒険とかさ」

「そりゃそーよ。でも、なるうの……いや、ネット小説の人気作品ってやっぱりありきたりだよ」

「まあな」

「作者が必死に奇をてらおうとしてるトコがむしろ痛々しいの。『ほづら、こんな斬新な設定は誰も思いつかないだろう』っていう意図が透けて見えるっていうか」

「で、考える事はみんな一緒だったりして、結局ありきたりになるって話だろ？　そうなるぐらいなら最初から王道をつっぱしたほうがいいよな」

そんな話をしていたら、部室のドアが乾いた音を立てて開いた。

そこから顔を出したのは、爽やかな黒髪の短髪に銀縁の眼鏡をかけた忌むべき……もとい羨ましい限りなイケメンで、この小説の優等生キャラ担当である男子生徒、きりやま桐山透だ。

「遅れてすまない。HRが長引いたんだ。」

「ああ、気にしないでいい。言ってるだろ？　毎日無理して来る事ないって。ここベツに大した活動してるわけじゃないからな。単に放課後、家に帰るのも嫌だけどダラダラしたいって思って美並がつくった研究会だから」

「その割に君は随分熱心に活動しているように見えるが。」

「まー、一応な。でもお前は塾とかも忙しいだろうし、こんなくだらない事に付き合わせるのも申し訳なくてよ」

「ちよつとー、くだらないとは何よくくだらないとは。あたしはこの研究会で研究した事をもとに、究極の小説を書いて文芸部の連中の度肝を抜く事が夢なんだから」

美並がクチをはさんでくる。なんだよ、究極の小説って。あほかこいつ。

「それより、何の話をしていたんだ？ 教えてくれよ。」

「小説家になろう」ってサイトのランキング上位の小説はありきたりな設定の小説が多いって話よ」

「ありきたり……言われてみればそうかもしれない。似たような設定の小説が、他にいくらでもありそうなものばかりが上位にあるように感じる。」

「でっしょー？ でもね、多分上位の人をありきたり呼ばわりするのは可哀想だと思うの。だって、上位の人がありきたりに見えるのは、それを真似した人たちがいっぱい出てきたからで、結果上位の人みたいな設定の小説があふれかえったのよ」

「……なるほど。流石は部長だ、しっかり考えている。」

桐山はそう言って部長である美並に感心していた。そして、その後も自分なりに意見を出してみようとしたのか、立ったまま腕を組んで考え込んでいる。

彼はおれが「まあ、かけろよ」と声をかけて、やっと椅子に座った。

何事にも真剣に取り組んでくれる人の良い奴だ、彼は。多分“超”が百回はつくほど真面目な人だ。

成績は学年の人数が二百五十人近くいるこの学校でも常に十位以内は確実にキープしていて、三位以内に食い込む事だって少なくない。その上、近所の道場に通っている生粋の剣道家。

誠実すぎる性格からか、近寄りがたい雰囲気身をまとい、クラスから浮いてしまうのがタマにキズ。

ここまでテンプレ

よくもまあ作者もここまでステレオタイプな優等生キャラな設定

にしたもんだ。学園モノの物語だったらこんなキャラは吐いて捨てる程いるっての。低脳を通り越して無能だよ作者は。

「どうした佐倉。顔色が優れないが。」

「いや、何でもない……それより、前々から気になってたんだけど桐山に訊きたい事があるんだ」

「訊きたいこと？」

そう、それはおれが彼がこの小説で発言してからずっと気になっていた事だ。明らかにこいつが、この三人の中で浮いている“違和感”。それは……

「桐山。どうしてお前のセリフだけカギカッコの最後に句点があるんだ？」

「句点？ 俺のセリフの最後に句点があるのか。」

「言ってるそばからつけてるじゃん！ 普通つけないもんだぞ」

「あー、そういえば桐山くん、いつも句点つけてるね！」

今まで気がついてなかったのか、こいつ。めざとい読者は多分桐山がセリフを言った瞬間気がついただろうよ。

最近の小説はカギカッコの最後には句点をつけないのがメジャーだからな。いまどき「HRが長引いたんだ。」なんて、ちよつと見ただけでも軽く違和感を感じる。それがネット小説ならなおさらだ。桐山は手をコメカミにやり、指でとんとん頭を叩き始めた。彼が考え事をするときの癖だ。

「確かに最初は句点をつけるのは今や不自然じゃないかと思っただんだ。でも俺は小学校の頃はカギカッコの最後には句点をつけるのが正しいだと習ったし、昔の文豪の小説には句点はついてる。だから、句点をつける事にしたんだ。」

「うーん、言われてみれば確かにおれもそう習ったな。何故か今の小説家はみんなつけないけど」

しかし小学校の頃に習った決まりを今でも貫き通すとは流石堅物真面目優等生キヤラ。

律儀つつーか、融通が利かないというか。

美並が突然机に両手をついて身を乗り出して言った。

「って、じゃあ句点をつけるのは間違いじゃないってわけっ？」

「うん。今はつけないのがメジャーってだけで、別に間違いというワケではないんだ。」

「そ、そうだったの……」

がつくし、という音が聞こえてきそうな程に肩を落とした美並は、ため息をつきながら席についた。

「なんだ、何か句点の事でトラウマでもあんのか？」

「いやね……前に“小説家になろう”に小説を投稿してみた事があるんだけどさ。」

「いきなり取ってつけたように句点つけなくていいぞ」

「はいはいわかったわよ。で、感想が欲しいからyahoo!の知恵袋に投稿した小説のURLを載せてアドバイスとかもらおうと思っただけよ。したら、なんて回答がきたと思う？」

「あつ……もしかして」

「そう。その回答者、自信満々に『まず小説を書く際の基本的なルールが出来ていません。カギカッコの最後には句点はつけませんよ』だなんて言うのよ。あたし、その回答みて軽くショックだったのに」「ああ……いるよな、間違った事をドヤ顔で回答する回答者は。特に小説のカテゴリに多い」

まあ、ドヤ顔かどうかはネットだからわからないんだけど、絶対ドヤ顔だろこいつ、って回答があるんだよこれが。

「その回答者のマイページ見てみたら、『小説についてのアドバイスを中心に回答しています』だなんてあつてさ。そいつの他の回答見てみたら『知恵袋に小説のアドバイスを求める人には面白い共通点があります。それは、初歩的な文章のルールが出来ていないものがあまりにも多すぎる事です。あなたの小説もそうですね』だって！許せると思う？」

「殺してやりたいね。まるで自分が小説を書く人の中で一番偉いんだあ、って言われてるみたいで」

そんなこんなで、話題はいつの間にかyahoo知恵袋愚痴にシフトしていた。あれ？いいのか？

「そっいえば何の話してたんだっけ？」
「忘れた」

何で異世界ファンタジー小説が多いんだろうね（前書き）

前回から間が空いているようですが、基本こんなマイペース更新になると思います。

何で異世界ファンタジー小説が多いんだろうね

美並とy a h o o！知恵袋の悪質な釣り質問に対する愚痴で盛り上がったとき、がらんと教室のドアが開いた。

しつとりとした黒髪のショートカットの小柄な女子が顔を覗かせた。無表情で。ここ重要。

彼女は眉ひとつ動かさずに部室の扉を閉め、最小限の無駄のない動きで空いている椅子にちょこんと座った。

四人目の、もとい最後の部員である野上静香^{のがみしずか}が入ってきたのだ。

「……………」

無言である。

さあ、ここまで言えば察しの良い読者はお気付きだろう。そう、彼女はこの小説の無口無表情クーデレ要員であり、長門 希波ジシヨンである！

作者の独創性の無さといったらもう、そろそろ著作権侵害で訴えられてもいいんじゃないか、ってくらいだろ、おい。

この小説の登場人物で誰か一人でもステレオタイプじゃないキャラがいたか！？ おれを含めて。

まあそれはそうと、彼女が来たことでこの部室も静まった。というか、ただおれと美並が黙っただけなんだが、それがキツカケで思いついた。

y a h o o知恵袋の話とか句点の話とかですっかり忘れていたが、“小説家になろう”のありきたり小説の話をしていたんじゃないかっただけ？

「そうよ！ その話をしてたのよ」

美並が叫ぶ。お前のせいで忘れてたんだよ。

「具体的にありきたりな設定っていうのはどういふものがあるんだ。」

「うーん……」

正直この小説の設定こそありきたりの中のあるべきところだと思いが……それは言っちゃいけないんだろうな。

「裕貴はどう思う？」

美並がおれにふってきた。ありきたりな設定ねえ……言われれば「そうそう」ってなるけど、訊かれると意外と出てこない。

考えてもよくわからんので美並からパソコンを奪い返して、ランキング上位の小説を読む。

うーん。美並の言うとおりの既視感……。

しかし、ランキング上位の小説と中堅あたりの小説を比べると、上位の小説には“王道”、中堅は“ありきたり”な印象を受ける。上位にも陳腐な設定もあるが、きちんと王道を行くものが多い。

まずいのは中堅あたりだろう。下手に奇をてらうあまり王道からも外れ、その上結局は他に同じ考えの人が多すぎて邪道にもなりきれず、ただ“ありきたり”なだけの設定が多い。

ま、おれらに言われたくはないだろうが。

ふと気がつくと後ろに野上が立っていた。気配もなく後ろに立つなよなあ……びっくりするから。なんて思いながら振り返るおれには目もくれず、ノートパソコンの小説を見つめている。

「……………」

無言。いくら長門ポジションでも、登場シーンから一言も喋って

ないって勘弁してほしい。

「何か気がついた事でもあるのか？」

「……異世界モノのファンタジーが多い」

「え？ ……あっ」

言われてみればランキング上位の小説はファンタジー一色。っていうか、そもそも連載されている小説はほとんどファンタジーじゃないか。

「言われてみればたしかにそうだな。」

「うん、たしかに！ ファンタジーばかりね！」

ははあ……どうりでこの超ありきたり小説の設定が“なるう”の上位小説には少ないはずだ。

これはたしかに陳腐極まりないアホ小説だが、ファンタジーではないからな。

「って、何でファンタジーが多いんだ？」と思わず誰へともなく疑問を投げかけたおれに

「多分、異世界ファンタジーモノは自分で世界観を作る事が出来るからだと思う。」と桐山が応えてくれた。

「えっ、どういうこと？」

「例えばミステリーを書くこうと思えば、当然舞台となる場所を調べておく必要がある。警察小説にするなら警察の事をよく調べておかないと物語は作れない。」

スポーツがメインになるならその協議について調べて知っておく必要があるし、SFを書くなら物理や化学に長けていなければ難しい。」

……一理ある。なんか遠まわしでわかりにくいが、異世界ファンタジーなら今桐山が言った面倒な点は全て無視できる。

世界観も細かいルールも全部自分で決める事ができるし、いざとなれば“実はそういう設定だったのだよ！”で全部すむ。

問題といえは元となる設定がない為に自分で全てを創らなければならぬ所だが、“小説家になろう”を含め、この世界にはテンプレとなる異世界ファンタジーは山ほどある。自分が出来そうな設定だけあちこちから拾ってくる事も可能なワケだ。

最悪、“ここはよくある剣と魔法のファンタジーの世界だ”の一言で設定の説明を済ませる事だつて出来なくはない。

そもそも異世界ファンタジーというだけで、誰しもがまずありふれたテンプレな世界観　例えばドラゴンクエストの世界のような　を想像するから、そもそもちゃんとした説明をする必要はなかったりするのだ。

説明をしなければいかに無理なく後付け設定をやりやすくなる。先の設定と矛盾する事を防げるからだ。

もちろんちゃんとした作家が書いたファンタジーはきちんと手抜きをする事なく世界観を読者に伝えるので異世界ファンタジーそのものを否定はしない。斬新で面白い世界観にする作家、設定自体はありふれていても描写を丁寧にして世界観を読者に近く感じさせてくれる作家、王道を進みながらも感動できる熱いストーリー展開をさせてくれる作家、と様々だ。

が、手を抜こうと思えばいくらでも手を抜けるジャンル、それが異世界ファンタジーなのである

「モノローグが長くて飽きるからここでカットするわね」

「ちょ……せつかくおれが必死に異世界ファンタジーについて熱く語ってたのに！」

「だ・か・ら！　モノローグじゃ伝わらないでしょっ」

「読者には伝わるからいいんだよ」

「読者にんーなどうでもいい事伝えてどーすんの！」

やれやれ…… あっ、しまったこれは禁句だった。ただでさえ陳腐な設定のおれが“やれやれ”なんて口走ったらますますテンプレ通りのラノベ主人公になってしまう。

「って、ちょっと待てよ。」

「ん？ どうした？」

「さっきからずっとこの小説のありきたりさを心配しているが……この小説は異世界ファンタジーではないのだから、少なくとも“小説家になるう”ではありきたりの部類には入らないのではないか、と思ってな。」

「そーいえばそうね！ そうよ！ 勇貴は馬鹿みたいに神経質になつてるけど、そこまで心配する事はないんじゃないかしら」

何を言うかと思えば……こいつらまるでわかってないな。

「誰が何と言おうとこの小説の設定は陳腐極まりないありきたり小説だ。それは間違いない」

「そう？ でも異世界ファンタジーではないわけだしさ……」

「美並、たしかに“なろう”では異世界ファンタジーはメジャーなジャンルさ。でも異世界ファンタジーに次ぐメジャーなジャンルといえは、何だかわかるか？」

「えっ？ ……うーん……なんだろ……」

桐山の方を向くと、少し頭を傾けて考えていたがすぐに思いついたようだ。

野上といえは何を考えているのか、もしくは何も考えていないのか、眉ひとつ動かさずにひたすら沈黙を決め込んでいる。作者は会話文ばかりで場面の描写は真面目にやる気ないんだから喋らないと

空気になるよ、と教えてやりたい。

「学園モノ、って言いたいんだろう？ 佐倉は。」

「流石優等生キャラ、わかってるな」

「学園モノ？ ふーん、そういえばそっか……」

「そう、学園モノだよ。何で学園モノが流行るかわかるだろ？ これまでの話を聞いてれば」

これでわからない、と言われたら誰のためにこんな馬鹿げた研究会に律儀に毎日行ってやってるのかわからなくなる。

しかし美並もわかったらしい。彼女はミステリを読みながら名探偵より先に答えを見つけたような顔で言った。

「学園モノ。つまり、登場人物は学生になるのね。学生と言えばよほどの事がない限りは誰しもが必ず通る道であり、小説を綴りながら感情移入もしやすい。」

しかも自分の母校もしくは現在通っている学校をモデルにすればいいから、警察小説とかのジャンルみたいに調べたり取材したりする必要もない。人生経験の少ない学生でも簡単に書く事が出来るからね。

学校つてのは特殊な場所だから“学園モノ”ってジャンルの出来事は学内で済む……つまり作者の経験内で書ける事が多い。それがメジャーな理由、でしょ！」

「よくできました」

つまり何が言いたいか、ってわかるだろ？

作者は相変わらずの低脳ほんくら野郎って事、さ。

設定の説明ばかりじゃ飽きるよね。話を進めろよ。

お約束研究会が部室だと言い張っている空き教室でしばし“お約束談義”をしていたおれたちだったが、そろそろ外も暗くなってきた気がする。壁にかかっている時計を見ると、そろそろ最終下校時刻だった。

この学校の最終下校時刻は今の時期は六時半という事だった。冬時間なら六時だが、幸か不幸か今は六月だ。六月？ 季節外れな小説だな、とか言っではいけない。そもそも作者がこれを書こうと思ったのは実をいうとその頃なのだ。筆が遅すぎるって。

最終下校時刻は六時半だがクラブ活動で顧問が認めた場合はこの限りではない。が、お約束研究会は部ではない。当然顧問もいないし、そもそも研究会どころかおれら四人が勝手に集まってダベっているのを研究会だと言い張っているだけなのだ。

部長である美並に「そろそろ帰ろうぜ」と声をかけ、鞆を肩にかけて立ち上がった。

「そうね……でも何かまだ帰りたくないなあ。今日は」

「あん？」

美並や二人も鞆をかけて、帰る準備を始めていた。桐山が電気を消してくれて下駄箱に向かっているときに美並が言った。

「ねえ、この後みんなマックでも寄ってかない？」

「はあ？」

下駄箱で靴を履き替えて帰る気満々だったおれは陰鬱いんうつな気分になった。

おれは早く帰って執筆中の小説を書き上げたいんだが……なんて

言っても聞かないんだろうな、こいつ。割とガチで書いてる“ノベリスト”ってタイトル学園小説なんだけどなあ……。

「みんなはどうだ？」と一応野上と桐山にも意見を求めた。

「あ、別にただ単に飯を食べに行くわけじゃないんだからね！ あれよ、最終下校時刻だから仕方なく場所を変えるけど、これは研究会の活動よつ。やっと話がのってきたっていうのに……ねっ」

美並が媚びるように揉み手で二人に言った。正直こいつはただ家に帰りたくないだけだろうとは思ったがあまりにも必死なので、ちよつと気の毒に思ってしまった自分が情けない。

「静香ちゃん、いい？」

と、野上に同意を求める美並。だから雨の日の捨て犬みたいな目やめろよ。

野上は「うん」と感情のこもっていない声で短く答えると、また沈黙した。感情がこもっていないと言っても決して“本当は嫌なのに”という意味ではなく、そもそも彼女の声に感情がこもる事が無いのだった。

時々彼女は何者なのだろうかと思う。まさかこの独創性の力ケラもない小説とはいえ宇宙人製のヒューマノイドなんて設定にするとはいえないし。

「桐山は？ いいのか？」

「研究会の活動の延長というのなら俺は構わないよ。ちよつどこのあいだ中間試験も終わったしな。」

「さっすが！ こんな熱心な部員を持って、あたしは誇りに思うわ！」

桐山はちよつと律儀すぎるぞお前。研究会の活動って言ったってただダベっているだけじゃないか。

「で、どうすんの？ 後はあんただけなんだけど」

と、おれの方を指差してにやにや笑っている。二人を味方につけてさぞやご満悦のようだが、味方なんていようとまいと、おれに拒否権があつた事なんて幼馴染だつた経験から言わせてもらえば、ない。

「わかつたよ。でもあいにく金なんて今ほとんどないぞ」

「言いだしつぺはあたしだしね、ここはみんなの分は奢つてあげる！ あ、でも一人二百円までね」

セコいんだか太っ腹なんだかわかりにくい、こいつは小遣いには大して不自由していないのだ。

なにせ父親が今売れっ子の小説家なんだからな。よしむら純一吉村純一**といえ**ば、多少でも読書をする人間なら誰しもが知っているはずだ。

本格推理、学園青春、SFなど幅広い範囲のジャンルで活躍し、特に彼の本格推理小説はまさに“本格”の名にふさわしい正統派ミステリで、ミステリ愛好家からの評価も高い。

せつかなんでこの際美並んちの身の上を説明する事にしよう。嫌な事はまとめて終わらせるに限る。

前述した通り吉村純一は今人気の小説家であり彼女はその一人娘である。母親は彼女が幼い頃に病気で他界した。それ以来は美並と父親である純一は二人暮らしであるが、純一は母親が生きていた頃も小説の執筆活動が忙しくあまり美並に構つてやる事がなかったという。

そのせいか父娘の関係は必然的に冷え切つたものになっていき、

美並自身父親に良い印象を抱いてはいないようだった。美並は父親が自宅以外で執筆活動をする事が多く、家を空ける事も多い。

そんな美並が父親しかいない家に帰りたがらないのも当然といえば当然なのかもしれない。

と、またしてもありきたり設定乙。漫画とかラノベ主人公orヒロインの両親が死んだり行方不明だったりするパターンが多すぎる。実際そんな家庭がたくさんあるわけがないというのにだ。いかにラノベが現実を蔑ろにしているかがわかる。

文句のひとつでも言っただろうかと思っていた矢先にマツクにたどり着いた。

この時間帯はおれらみたいに学校帰りに寄ってく学生や、そもそも学校に行くつもりのないヤンキーだのでそれなりに混んでいる。

注文は美並と桐山に任せて、おれと野上は席をとっておく事にした。

「裕貴何にすんの？」

「あー、えー、じゃあシェイクで」

「静香ちゃんは？」

「……私も」

そついい残すと、おれと野上は二階にある席に陣取った。……はいいが、そついいばおれと野上が一人で話す事なんてないぞ、気まずすぎる。

「……………」

もつとも野上はそんな気まずさをおれと共有するつもりは毛頭ない、と言わんばかりに無口無表情長門ポジションキャラの設定を忠実に守っている。

そもそも彼女はなぜこんな意味不明な研究会に籍を置いてくれて

いるのだろうか。

単に作者が無口キャラが欲しかった、ってだけの理由じゃないだろう。流石に。

だいたい彼女は何者なんだ。普通は宇宙人でもない限りここまで無口無表情って事はないぞ。実際。そんな女の子がいるのはライトノベルの世界だけだ。どんなに無口な女子だって、仲の良い女の子と話すときはそれなりに話すし、表情だってそれなりには変わるはずなんだ。

流石にここまで無口無表情だと現実世界にいるとコミュ障呼ばわりされるレベルだろう。そこらへんのリアリティもこの小説にも欠如している。作者はやはりボンクラなんだろうな。

つかやばいって、ただ設定説明してるだけでもう三千字近い。作者がそろそろ飽きる頃だぞこれ。今回だけ長くなっても不自然だし。

「ん、お待たせ」

と言って、お盆を持った美並と桐山が席に来了。

注文した通りおれと野上はシェイクで桐山がコーヒー。美並は…海老フィレオセット？

「そんなにがつつり食うのか」

「いーのよ。どうせ帰ってもロクな晩御飯が用意されてるわけじゃないんだから」

投げやりな表情で吐き捨てる美並を見て、おれはまた陰鬱な気分になる。

と、美並が顔を近づけて来て、小声で言った。

「……そんな事より、ここまで来る間に小説の設定を説明するだけ

したんでしょね？」

何を言うかと思えば、またそういうメタ発言か。モノローグでなくともかく発言にすると萎えるぞ。

「したよ」と短く答えて手元のシェイクを啜った。甘ったるい味が舌に広がり、喉を通り抜ける。これでは余計に喉が渴く。ウーロン茶にしなければよかったかな。

「ちよつと疑問に思ってたんだが。」

桐山がコーヒーを置いて言った。最後に句点がつくからこいつが喋ったときは一発でわかるなこれ。

「今回は大した進展も会話もなく、ひたすら設定を説明するばかりだったよな。これでは駄作と言われるのではないかと心配になっただけな。」

「安心しろ、この小説は駄作中の駄作だから胸をはれ！ 聞いてたかよ、今までの陳腐な設定を」

「設定の陳腐さはとりあえず置いておいて、だ。小説というのは設定を説明すればいいというものではない。スピーディーに話を進めて展開して膨らまさなければ読者は飽きる。小説の鉄則、と言ってもいい。」

言われてみれば、その通りだ。そういえば過去におれの小説の批評で言われた事がある。会話中心にスピーディーに話を進め、読者を飽きさせずに読ませ続けるようにしろ、小説は物語であって設定の説明じゃない

「美並はどう思う」

「そうね……斬新な設定ならまだしも、この小説の設定を説明され

るのって苦痛極まりないだろうし」

お前それを言うなよ……そういう話じゃないし。

「だから設定の説明は程々にした方がいいと思う。」

「でも納得がいかねえんだ」

ああそうさ、今回は最初っから最後まで設定の説明会だよ。でもその何が駄目なのさ……？

「……………」

野上は依然黙ったまま。こうしてたまに目を向けてやらないと絶対に物語からフェードアウトするって、お前。

「おれはこれでも、人並み程かは分らんがそれなりには本を読んできた。設定の説明ばかりの話だってあったし、それでも読み進めた！ 何が悪いんだよ！」

「何をそんな憤^{いきどお}ってるのよ、あんたは」

「例えば、どんな小説を読んでいたんだ？」

「例えば？ そうだな……たとえば推理小説なんかには説明ばかりだろう。現場、トリックの説明はいいとして、人物の生い立ちや性格まで説明する作品だってあるさ。有栖川有栖の作品とかそうじゃないか？」

「火村英生、か。俺も少しなら読んだ事がある。」

「あたしはないかなあ、知ってるけど」

「野上は？」

「ある」

結構知ってるじゃないか。まあ結構有名だもんな、あの人も。有

栖川も好きだが正直言つて綾辻行人がさらに好き、でもあの人は有栖川ほど説明説明じゃないから黙っておくか。

「有栖川がどうかしたのかい。」

「ま、この流れでいけばわかると思うが……あの人も割と設定の説明的シーンは多いぜ。ある時は、“〳〵の経歴と人物を少し述べておこう”みたいな感じで説明宣言する事すらある。

何が言いたいかわかるな？　つまり、有栖川みたいにそれなりに名が売れている人でさえ設定の説明は当たり前前にやるんだよ。文句言われる筋合いなんてないってわけだ」

そこそこ説得力あるんじゃないのか、と自惚れながら思いながら熱弁を振るつた。そもそも推理小説は推理を楽しむものだから設定の説明なんざ何ら問題にはならないどころか当たり前なんだが、あえて言わないでおこう。

「そうね！　気にしないで問題ないんじゃないかしら」

「いや待て。そう簡単に決め付けていいのか。」

「妙に引つかかるな、桐山」

「たしかにそうさ、設定の説明が多くとも読める小説は読める……が、ネット小説ならどうだろうか。」

「どういう意味だ？」

「本で読むなら楽な姿勢で集中して読めるし、しおりを挟んで少しずつ読める。が、ネット小説は違うんじゃないかと思うんだ。」

「あつ、そうか。ずっとモニターの文字ばかりを追って読む作業は普通に本を読むよりも疲れるのよね。ただでさえ読むのが疲れるネット小説で説明ばかりじゃ飽きられる。そういう事ね、桐山くん？」

「ああ、そつだ。」

残念ながら反論の言葉が思い浮かばない。

つまりどういつ事が、って説明ばかりの今回は最後まで読んでも
らえないって事ぞ。

ミステリ編、突入！（前書き）

今回からミステリーのお約束論がテーマになる予定です。

ミステリ編、突入！

「って、タイトルがいきなり意味不明だよ説明しろよ」

そう言っておれは部室の机を叩く。ミステリ編って何？ ナメてるの？

「まあ、落ち着きなさいよ裕貴。作者も淡々とお約束談義してるだけのこの小説の嫌気が差したのよ。今回からはミステリ風味な作品になるらしいの」

そうかそうか作者はミステリがやりたいのか、じゃあ今からおれが作者を殺しに行くから自殺ってオチでこの小説を完結させようじゃないか。

いきなりミステリ編？ ぶっ殺されたいの？

「野上もおかしいと思うだろう？ いきなりミステリー編に入るなんて」

「……………」

と、部室の隅っこでジョン・デイクスン・カーを読みながら相変わらず無口キャラに忠実な野上。

何を考えているのかわからないし、お前前回も完全に空気だったんだからマジで発言してくれ、頼む。

でもデイクスン・カーを読んでいる時点でその気は満々なのかもしれないと思った。デイクスン・カーといえば知る人ぞ知る推理小説作家で、特に密室モノが得意な巨匠だからな。

おれは実を言うとあまり好きじゃないんだけどな。海外ミステリ作家といえばおれはスー・グラフトン……

「はい、誰も聞いてないからね！ そんな事より、ミステリ編って言うからには何か事件が起こるはず……」

「おい！ 聞こえているだろう！ おい！」

突然、隣の教室から怒鳴り声が聞こえた。あそこは確か、ミステリー研究会だったはずだよ。後付設定。

ここじゃよく聞こえないので思い廊下に出る。他の部員三人も一緒だった。

するとミステリ研究会部である内田が、ミステリ研部室のドアをどンドン叩いているではないか。そのそばには他のミステリ研の部員もそろっていた。といつても、内田以外には部員は鮎川、西村、山村の三人だけなんだがな。部員の少なさじゃお約束研究会と肩を並べる…… ってうちは正式な部じゃなかったな。

「おい！ 開ける！ 開けてくれ、西村！」

「何があつたんだ？」

嫌な予感を感じつつも内田に尋ねる。いや、もうミステリ編なんだ、何が起こるかは明白だが。

「ああ、佐倉か…… 西村が部室に鍵をかけたまま眠っちゃったみたいだな。おれたち他の部員が中に入れないんだよ」

ドアの小窓を覗くと、西村が机に突っ伏して眠っているように見えた。

「ここの教室の鍵なら職員室の前に置いてあるじゃないか。それを使えばいいだけだろう。」

と桐山が意見を述べた。ぐもつともだが、ここまでの前フリを考えるとそれは……

「見てみる」

内田がドアの小窓を指差して言った。覗いてみると、案の定その鍵は教室内に転がっている。

ここまで読んで、かつミステリ編がどうのこうのとのたまっているんだ。どんなアホでもここからの展開くらい予想がつく。

「そもそも、どうして鍵をかけたのよ？　しかも教室の鍵を持ち込んでんじやって。あれは移動教室のときの戸締りぐらいにしか使わないじゃない」

「おれに聞かないでくれ。西村は一体、何を考えているんだか……」

内田はうんざりしたような顔で言った。おれは思った。こいつ馬鹿か。タイトルも読めないのか。何が起こっているかなんて猿でもわかるのだ。

「おい、ぶち破るぞ」

「えっ」

「えっ、じゃないだろ。本気で奴が眠っているだけだとも思っているのか？　さっさと話を展開させたいんだ、お前もミステリ研の部員ならわかるだろ？」

さっ、と内田の顔から血の気が引く。やっとわかったか。

「そんな……まさか、そんなわけがない」

「恨むなら作者の無能さを恨むんだな。今はこの教室に入る事が先決だ」

ミステリ編突入のタイトル。そしてデイクスン・カー。ああ、作者はくたばれ。

お約束通りと言うべきか、おれと桐山と内田の三人の教室の扉に体当たりだ。三回ほど衝撃を与えた時点であっさりとドアは破れた。横開きのドアが何故体当たりで開くのだろうか。どうせ鍵がかかったドアといえば体当たりのイメージしかなかったんだろう、作者のアホには。

ドアを開けて中に入ると西村はやはり、机に突っ伏したまま死んでいた。あっさりしすぎていると思うだろうが、こんな事はドアをぶち破るまでもない。教室に鍵がかかっていた時点でまる分かりなのだ。

「西村……おい、西村！　しっかりしろ！　西村、西村
っ！」

内田が突っ伏している西村の肩をゆする。「ちょっといいか。」と桐山が西村の生死を確認するもやはり死んでいるらしかった。桐山は万能キャラだからこういうときに超便利。

「ねえ……本当に西村くんは死んでいるの？　別に体はなんともなさそうじゃない……寝ているだけじゃないの？」

山村が絞り出すような涙声で桐山に訊いた。山村はミステリ研の紅一点で、綺麗な茶髪のみディアムの可愛い女子だった。割と軽い感じでモノローグをやっていたが、この子にとっては西村は同じ部員の仲間だったのだから悲しむのも当然だった。

「残念だけど心臓が止まっているんだ。死斑も少しだが出ている。手があっさりと開いたから死後硬直はまだのようだ……」

桐山の言葉を最後まで聞く前に彼女はそれまで堪えていたものが崩れるように泣き始めた。

隣にいた鮎川も言葉もなく立ち尽くすのみだった。おれらもそうだ。常時無表情な野上は知らないが、美並も陰鬱な表情をしている。胃の奥が冷たくなるような感覚に襲われていたのは、おれだけではなく桐山もそうに違いない。

ミステリ編が始まるという事で覚悟はしていたが……やはり覚悟をすれば何とかなるはずでもない。冷たい胃の奥から寒気が広がっていき、体全体が凍りついたかのようにその場から動けなかった。

ミステリ編、突入！（後書き）

もう1、2話ミステリ編続くと思います。

クローズドサークル（前書き）

ご無沙汰してました。

大変難産でした。

単純になまけていたという事もありますが、それ以上に難しい。
言うほど大したものではない）

携帯で見るとルビが変な事になります。

クローズドサークル

西村が死んだ。ミステリ編を始める、なんて言っただ途端にこれだ。早速人が死にやがった。

いくらなんでも悪ふざけがすぎるんじゃないのか、この作者でも

……

面白半分でやっていい話じゃない事ぐらい分かっているはずだ。

小説内とはいえ人ひとり死ぬ、なんて……普通に話を進めるのに飽きたからといってミステリ編にして学園内で殺人？洒落になつていない。

部屋の入り口付近で山村が泣き崩れている。鮎川は握り閉めた拳こぶしを打ち震わせている。おれと一緒に扉をぶち破った彼は立ち尽くすのみだ。……と思ったのだが、こんな死体のある教室にいられなくなったのか、外の空気を吸いたくなつたのか、乱暴に入ってきたドアを開けると部屋から出て行ってしまった。

「で？」

おれは桐山に声をかけた。

「西村はどうやって殺ころされているんだ？」

「ああ、それは多分……毒殺だな。」

「ふん。毒殺か」

「そこを見てみる。小瓶が転がっているだろう。」

転がっている小瓶を指紋を付けないように拾い上げた。

「これは……睡眠薬の瓶か？」

「そうだ。他に死体に外傷はないし……おそらくそれを大量に摂取

したか、もしくは“それ”にもっと強烈な毒物が塗られていたりしたか……だと思う。」

本来普通のミステリなら　この状況はまず申し訳程度の自殺説が囁かれるるシーンだと思う。毒にしろ睡眠薬しろ、わざわざ密室で殺す必要がないからだ。西村の睡眠薬に毒を仕込んだらそれでおしまいでもいいじゃないか、密室にしてもメリットなんて何もないという感じにだ。

でもそんな無駄な議論はされないだろうと思っていた。他殺と分かっていてる事をあえて自殺説なんて出す労力も時間も無駄だ。わざわざ律儀に自殺説を持ち出してくれる人がこの食わせ物の中にいるだろうか。

「　自殺じゃないのか」

そう思っていたものの、鮎川がやはり自殺説を持ち出した。ひねくれた考えを持っていない純粋な奴だと思った。

「鮎川、お前なら“ヴァン・ダインの二十則”を知っているだろう」

そう言うのと、鮎川は露骨に顔をしかめた。

「ああ……そういう事か」

「そうだ、第十八項は何だった？」

鮎川は心底うんざりした表情で答えた。

「……事件の結末を事故死とか自殺で片付けてはいけない。こんな竜頭蛇尾は読者をペテンにかけけるものだ。」……だったか」

「なんせお約束が大好きな作者だ。“二十則”なんてのは格好の的

だろ？」

「やれやれ……」

つまりいくら自殺じゃないのかと声高に叫んだところでお約束好きな作者がそれを破ると思えない、というのが鮎川以外の面子の考えだと思う。

「おい、警察は呼んだのか」

「呼んだは呼んだが……すぐには来られないらしい」
「何故」

桐山が窓をこつこつと叩きながら、

「この天気で、な。」と答えた。

窓の外を見ると吹雪だった。いつの間にこんな天気になっていたんだろう。十二月だからおかしくはないが、それにしても……

窓を開けて首を出す。凍えるような冷気に襲われた。部屋の中から見るよりも吹雪は厳しいし雪は大きい。下を向くと関東とは思えないほどに雪が積もっていた。

おかしい。いくら十二月とはいえ関東でここまでの天候になるとは。ここは四階だが、ここからでも分かる。一メートルは積もっている。不自然にも程がある。

「寒いから窓、閉めてよ！」

「あ、悪い」

美並に言われて、慌てて窓を閉める。

「ここから警察署じゃ結構な距離があったよな。この猛吹雪と積雪

じや千葉県警じゃここまで来るのは相当困難だぞ……もしかすると今日中には無理かもしれないそうだ」

鮎川が身震いしながら言った。

＊

とりあえず教師　ミステリ研究会の顧問　に事件があつた旨を伝えた。警察が駄目でも教師には伝えておくべきであろう。「先生、西村が死にました」と言つと冗談に付き合うような顔で「^{エイプリル}四月莫迦は今日じゃないぞ」と笑つていた。冗談じゃないんだ、これが半ば強引に部室まで引つ張つていつて西村の死体を見せたときの顧問といつたら、それはもうみつともないくらいの狼狽のしようだった。足は震え、冷や汗を流し、うろたえるにうろたえた挙句、職員会議めいたものを始めるつもりらしい。

「今から俺は職員室に行つて他の先生方にもお知らせしてくる。佐倉、お前はもう帰れ。他の連中もだ」

「残念ですが、この吹雪じゃ電車も動いていないでしょう」「そうか……そうだな……じゃあせめて別教室で電車が動き始めるまで待機していてくれ。ストーブ焚いていいから」

「そうします」

「ああ……あと、この事は出来るだけ他の生徒には知らせないでおいでくれ。^{かんこうれい}緘口令つてやつだ」

そう言つと足早に職員室にかけていった。

さて。作者がいかにゴミクスかは今までの話を読んでくれた人は理解していると思うが、今回はひどい。ホントにひどい。

ふざけたおしている。

今は十二月。そしてここは関東、千葉県だ。そこに電車が止まるほどの猛吹雪、そして警察も来るのが遅れるほどの積雪。毎年のように異常気象と騒がれているのをいい事にこんなとてつけたような展開にするとは思わなかった。作者は単にこの状況をクロードサークルものにしたかっただけじゃないか。

なんせ関東の電車はよく雪が降る地方と違って吹雪にでもなればスグに止まる。積雪に慣れていない地方の県警なら来るのも遅くできる。……というこのシチュエーションがやりたいがためにこんな異常気象を引き起こしたらしい。

思わず舌打ちが洩れた。いかにも作者らしい陳腐なミステリ（笑）じゃないか、くそつたれ。

そもそもクロードサークスものにした理由がふざけてるんだ。おそらくは、警察組織の介入まで描写できる力がないと作者が自分でわかってるからだ。それに登場人物に探偵役をやらせるには警察は邪魔だと考えたに違いない。そもそも警察がちゃんと来てればこんな事件きつと二秒で解決するだろうなと思っていた。

おれはひとまず現場にいる美並、桐山、野上に、内田、鮎川、山村を隣の教室　おれらの研究会の教室　に集めた。職員室から借りてきた古臭い石油ストーブを焚くと、冷え切った部屋の空気はとりあえずは暖まった。

「ん、おかえり裕貴」

と、美並が缶コーヒーを渡してくれた。ありがたい。美並曰くおれが先生に知らせに行っていた間に野上が自販機で買ってくれたらしい。

熱い缶にかじかんだ手を当てがりながら、電車が動くまでの暇つぶしにでも　という事で、件の談義を始めようかと声をかけた。

「そうね。どうせ犯人はあたし達の中の誰かになるだろうし、あたし達の中の誰かが事件を解決する事になりそうなものね……そうじゃないとお話にならない。クローズドサークルなら尚更ね」

美並が皮肉たっぷりに同意した。誰に対する皮肉かは言うまでもなく作者にだが。

そう、どうせ警察が来る前に事件は解決するストーリーにするつもりなんだろうよ。

「まず動機の線から洗っていった方がいいんじゃないか」

そう意見を述べたのは内田だった。

「基本だな。いくらこの中に犯人がいるといっても、おれらお約束研究会とそっちのミステリ研を合わせれば七人。動機のあるなしだけでも目安にはなる。」

「ちよつと待つて、あたし達も容疑者に入ってるの？」

と、美並が目を見開いていった。「当然だろう」と内田と鮎川が声をそろえて返す。

「シリーズキャラクターなのよ！ あたし達の誰かが犯人なんて事になつたら……」

「いや待て、美並。作者もそろそろ潮時だ。ここでおれらを犯人にしてBAD ENDにして完結させるつもりかも……」

「ふ。不吉な事言わないでよ！」

事実、作者はもう限界っぽいし……前回更新からただだけ待たせるつもりだよ。

と、いつものようにメタネタでお茶を濁している場合ではない。

おれもあんな風には言ったが、本音を言えば美並や桐山、野上を疑っているわけではない。疑念のギの字もない。そんな可能性を検討するのもアホらしい。ただ便宜上公平を期さなければ奴らが納得しないような気がした。

「じゃあ、動機について検討するとうかが」

内田がそういった。

*

「動機……と言われてもね。そもそもおれと彼とはほとんど接点もないし。まあ多少は隣の部室同士って事で仲良くはしてたけど」

「同じだな、殺したい動機を持つほど距離は近しくはなかった。」

「わたしだってないわよ！ 冗談じゃないわ、どうしてこんな事に……」

「落ち着けよ、山村。一応念のために全員に訊いてるだけだから……」

……鮎川は？」

「奴とは良好な友人関係を築いていたと思う。殺したいなんて、そんな……思うはずがない」

「あたしは桐山くんや裕貴と同じかな、そんな仲じゃなかった。静香は？」

「ない」

とまあこういった感じで、そりゃあ誰も「自分は彼を殺したいほど憎んでました」なんて言うはずもなく、全員が動機はないと主張するもそれを証明するものも否定する材料もない。ないない尽くしだった。

ならば各々思い当たる人の動機めいたものをあげつらう事になる
んだろうが やれやれ、これ以上殺伐とした雰囲気になるという
のか。とつくに空になった缶に残る温もりをなんとなく手で感じつ
つ、そんな風に思っていた。

そもそも西村という男は敵を作るようなタイプではなかったよう
に思えた。毒にも薬にもならないとは彼のためにあるような言葉で、
誰に対しても一定の距離をとって接しているような、そんな奴だっ
た。

そんなわけでおれも彼と親友だったとかでもなく、一定の距離を
とってお互い必要以上に踏み入らない、それこそ“良好な”友人関
係だったのだ。

だから部が違うお約束研はもちろんの事、ミステリ研にだって殺
したいと思うほどの強い敵意を持った人間はいない、と断言できて
しまうような気すらした。

「いや、待てよ。」

沈黙を破ったのは桐山だった。(といっても句点がある時点で読
者にはわかるんだけど)

「どうした」

「こんな議論に意味があるのかな。」

「どういう意味だ」

「作者がやりたいのはつまりホワイダニットなのかフーダニットな
のか、それともハウダニットなのか……って事さ。」

「……？」

「もしホワイダニットじゃなかった場合、あのへボ作者は果たして
動機の部分まで真面目に考えるだろうか。」

ホワイダニット。つまり、“どうして殺したか？”の部

分だ。たしかに作者は見せ場じゃない場面を真面目に描写したりはしないし設定も真面目に考えないとんだボンクラだ。

ちなみにフーダニットは“誰が殺したか？”。ハウダニットは“どうやって殺したか？”が主題になってくる。どうも密室を登場させたあたりハウダニットくさい気はする。

要するに彼は存在するかもわからない動機を探すより、他の糸口から犯人を捜そうというらしい。その方が犯人を突き止めるには賢明だろう。誰にも動機なんてありませんでしたじゃそこで行き止まりになる。

こんな風に作者の性能まで考慮に入れなければならない推理とは、やりやすいんだか、やりにくいんだか　　と思っっているに違いない。が、おれも一応口を挟ませてもらおう。

「ちょっと待ってくれないか」

「どうした。」

「作者はたしかに究極のダメ作家で、何をするにも自己満足で終わらせるような最低野郎かもしれないが……いくらなんでも動機くらいは考えるんじゃないか」

「えー、そうかなあ？」

美並が口を尖らせる。

「作者には作者なりのプライドってのはきつとあるさ。動機もなく殺人なんていくらなんでも」

「やけに作者の肩を持つじゃないか。」

「考えてもみる。密室のトリックを考えると、それらしい殺人の動機を考えるのだったら、どっちが簡単か」

「言われてみればたしかに簡単なのは動機の方かも」

美並はもう納得いったような顔をしている。

「最悪動機なんて、『ハンガーを投げつけられたから』とかにしちやえば、たとえ嵐のような非難がきてもとぼけられる。密室トリックはそうはいかないだろう。むしろ動機の方を一生懸命考えている気がするんだ、おれには」

「お前がそこまで言うんだったら動機の線についてももう少し考えてみるか」

そう同意してくれたのは鮎川だ。彼はこんな事件が起きても比較的終始冷静で助かるなと思った。

他のメンバーもそれに合わせるようにまた動機の線について考えてくれた。

「……………」

三点リーダーの連続を見るだけでわかる。野上がおれの方を食い入るような無表情で見つめている。

何か言いたい事でもあるんだろうか。

「……………」

無表情の彼女にしては珍しく、わずかに眉をひそめると、またその表情は虚空を眺め始めた。

自分の手を見つめると、ストーブで空気は乾燥しきっているはずなのに、じつとりと汗ばんでいた。

もしや野上は真相に気がついたのだろうか。だとしたら黙っていないで喋ればいいのに、これが無口無表情キャラの宿命なのだろうか。

なににせよ野上には要注意だな。彼女はあれで全てを知っているのに言葉に出すのが苦手なだけなのかもしれないのだから。

そう思いながら、おれ達は動機についての談義を再開した。

クローズドサークル（後書き）

もう分かる人には犯人わかるかもしれません。それほどあからさま（？）です。

竜頭蛇尾でアンフェアでガツカリなオチ（前書き）

例によって携帯で見るとルビがおかしくなります。
もし楽しみにしてくれてた方がいたらこんなオチで申し訳ない。

竜頭蛇尾でアンフェアでガツカリなオチ

それからしばらくの間、西村京次郎殺人事件（命名おれ）の動機談義は続いた。

たしかに作者は動機くらい考えてるだろう的な事にはなったが、果たして本当に真面目に考えてるんだろうな。

「何か思い当たる事はないのか、何でもいいんだ」

そういうと、内田が「そういえば……」と呟いた。

「何か思い出したのかい。」

「うちの研究会ではそれぞれの会員にミステリ小説を書かせて会誌をつくっているんだが……」

そういえばそんな話を耳にしたような気がする。

「もしかして、西村の書いた小説が誰かの盗作だったとか、とんでもない駄作で会誌の足を引っ張ったとか、そういう話か？」

と、適当に思いついた考えを述べてみる。そんな理由で殺されたらたまったもんじゃないが、この作者ならやりかねないような気がした。内田はゆるゆると首を振り「そうじゃない」と答えた。ちょっと安心した。

「逆なんだよ。西村の小説は……傑作だったんだ。プロ顔負け、いやそこのプロ作家なんて目じゃない内容だった。それこそこの小説なんかとは比べ物にならないくらいだね」

「凄いね！ そんな人だったんだ、西村くんって！」

そう言つて美並が手を打った。それなら殺される理由もないはずではないか。

「こんな無茶苦茶な動機はありえないと思うが、ひよつとしてその小説の出来に嫉妬して……とかじゃないか」

内田はおそろおそろといった感じで述べた。まあ、ありえない話じゃないと思う。それならうちの部員は全員除外できるつていう自分に都合の良い理由もあるが、そもそも作者が考える動機がどんなに不条理だつておかしくないという事に気がついた。

問題はミステリ研の方だが、内田は……果たして自分に不利になるかもしれない動機をわざわざ言うだろうか。なにせその“動機”は自分にも当てはまつてしまうのだから。

では鮎川、山村はどうだ？　ありえない話ではない。犯人はこの二人のうちのどちらかなのだろうか。

それとも、おれたちの疑いの目を承知で内田はこの意見を持ち出したのだろうか。わからない。

おれは飲み終えた缶をゴミ箱に投げ入れると、その足で窓の外の様子を見た。

相変わらず関東とは思えないほどの猛吹雪は収まる気配すらない。激しい横殴りの大雪が窓に叩きつけられる。ここまで無理矢理なクロードサークルが他にあるだろうか。

考えても犯人なんてわかりそうもなく、うんざりした。クロードサークルになった目的は、いとも違和感なく容易く、警察を差し置いて素人であるおれたちが真相を突き止める探偵役に甘んじる事が出来るからだろう。警察が介入しつつもおれたちが名探偵になるのは無理があるからな。

それにしても、なんなのだろう、このやる気の入らなさは。イマイチ本腰を入れて推理をする気になれない。理由はおよそ見当がつ

いているが。

おそらくは、このクロードサークルはおれたち以外にも人がいる学校内で起きた殺人だから、そして二人目が殺されていないからだ。例えばこれが、山奥の山荘に集まった八人のうち二人が殺されたら？

そうなれば誰だつて目の色変えて推理するさ、何せ自分も殺される可能性があるのだから。そう、クロードサークルの醍醐味は“自分も殺されるかもしれない恐怖”だろう。アガサ・クリステイの「そして誰もいなくなった」然り、皆殺しの恐怖の身を切るような緊張感の中、しだいに明らかになっていく真相。これがいい。

それに比べてこっちはおれら以外にも学校に残っている人は大勢いて、一人殺されただけだから“次は自分かも”という恐怖もない作者がやりたかったのはおれらの退路を断つ事と警察の介入を防ぎたかっただけ。激しく萎える。

そもそも電車が動いていないというだけでこの空間が閉鎖されているわけじゃない。美並なんて一駅離れてるだけだから歩いて帰ろうと思えば帰れる。

「やっぱり密室トリックを考えましようよ。作者のトリックなんてどうせ噴飯ものの陳腐で簡単なものに決まってるのよ。その方面から推理した方が確実じゃない？」

そう意見を述べたのは美並だった。たしかに動機からでは犯人なんてわかる気がしない。

といっても密室からならわかる気がする、というわけではないが

……

「そうだな。ずっと動機動機じゃ、頭が働かない。別の方向から見れば何かわかるかもしれない。」

「決まりね！　じゃあ、密室の謎を説明しましう！」

美並ときたら、心なしか楽しそうじゃないか。まあたしかに「密室の謎」って響きはいいいが……人がひとり死んでる事を忘れるなよ。

「……………」

そういえば野上は冒頭でデイクスン・カーを読んでいたな。もしかしてこのトリックが肝になるのか？

半信半疑でそんな事を思いながらも、いつのまにか議論の方向は密室にシフトしていた。やや行き当たりばっかり感が否めないがこの面子じゃどうしようもなさそうだ。

「そもそも」と内田が切り出した。

「どうして睡眠薬で殺されて密室にされたかだよな」

そう、密室の事を考えるとまたその問題に戻る事になる。無難に考えるなら自殺に見せかけたかった……というところだろうが、わざわざ密室にして服毒自殺をする奴つてのもねえ……。

それにヴァン・ダインの二十則にもある通り、自殺で事件の幕が下りるのはタブーであるからして、つまり実際そうだったように誰も自殺だなんて思っではくれない。それとも犯人は本気で自殺に見せかけられると思ったのだろうか。

「そこを考えてるといつまでも先に進めそうにない。その問題はひとまず置いておこう。深い意味などないのかもしれないしな。」

「そうだな、まあ十中八九自殺に見せかけたかったんだろ。おれらが“二十則”に従って推理を進めるようなひねくれものだとは思わなかったってところじゃないか」

内田がそう同意したのに成程と思ったものの彼自身犯人じゃないという保証がない以上あまり鵜呑みにするのもまずいだらう。

「ふうん。でさ、教室のドアの鍵はあれしかなかったの？」

という美並の問いに、鮎川が「合鍵という意味ならないが、マスターキーが職員室にあったはずだ」と応えた。

「それなら話は簡単じゃない。犯人は西村くんを毒殺した後その教室の鍵を中に置いて、マスターキーを使ってドアを施錠したってだけの話でしょう」

「流石にそこまで簡単な話じゃない」

言いながら首を横に振ると、美並はがっくりと肩を落としながらも「でしょうね」と応えた。

「先生に言いに行ったときに訊いておいたさ。マスターキーはここ最近は一度足りとも職員室から動いていないとの事だ」

「そう……」

「まあそう気を落とすなよ。そこまで作者も馬鹿なオチにはしないだらうし。」

いや、そうとも限らないよ、とはあえて言わなかった。もしかしてもっと馬鹿なオチかもしれないのだからマスターキーオチの方がまだしもマシだったのかもしれない。

「もうひとつの可能性といえば……」と山村が遠慮がちに呟いた。さっきまでの彼女の様子を見る限りはとも議論に参加する余裕はなさそうだったのだが、どうやら大分落ち着いてきたらしい。それでも彼女の声に普段の張りはなかった。もっとも、それ自体が全て

彼女の演技で山村が真犯人という可能性もないわけではない。

「施錠した後に何らかの方法で鍵を教室内に入れた、とかじゃないかしら」

「何らかの方法ねえ」

山村は「例えばそうね……」と言ってしばらく首を傾げ、

「教室のドアの隙間に入れたとか……かな」

「ドアの隙間？」

「うん。ほら、あの横開きのドアって二枚あるでしょう。教室の内側と外側の溝にそれぞれドアがあつて、二枚の間には隙間があるじゃない。教室の鍵くらいならそこから投げ入れられると思うのよね」

「あ、ナルホド！ たしかに、あの鍵ってちっちゃいし、平べったいもの」

「いや。」

桐山が異を唱えた。

「残念だが、鍵は教室の中央、それも机の上にあつた。

教室のドアの隙間から鍵を投げ入れたとしたら鍵はドアの近辺になければおかしい。仮に遠くへ投げる事が出来たとしても壁際にあるはずだ。だが鍵は教室の真ん中、それも机の上。ドアの隙間からじゃとても無理だろう。」

「ああ、そう……そういえば、真ん中らへんにあつたわね」

山本も最初からそこまで期待して言つたわけじゃないのか、あっさりと自分の説を捨てた。

「……窓」
「えっ？」

野上が急に重い口を開いたので驚いて思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「窓の鍵、閉まってた？」

野上が質問を繰り返した。おれは思わず窓の方へ目をやっていた。

*

「ああ、考えてみればあのときは確認するのを忘れていたな、迂闊だった。お前は窓を開けて外の天気を見てたろう、鍵はかかっていたのか？」

鮎川が野上の質問の意味を補足するかのように問うた。それに応えようとするおれを野上がまた感情のこもっていない目で食い入るように見てくる。無表情ながらも血も凍るような迫力を感じる。

「ああ、窓の鍵ね。閉まってたよ、もちろん。開いていたら言うてるって」

たしかに窓の鍵がかかっているかどうか知っているのはおれだけだ。他の誰が確かめる間もなく、おれが窓を開けてしまったのだから。

「でもな、野上。たとえ鍵が開いていたとしてもここは四階だ。落ちたらただじゃ済まない。いくら何でもここから飛び降りようだな

んて思わないだろう、犯人でも。少なくとも、ここにいる人間の中には怪我を負っているような人は、いない」

「……………」

いくらなんでも密室の謎の答えは、“犯人は窓から飛び降りたのです！”じゃ、ミステリファンに死ぬほど石を投げつけられるだろう。今まであったどの説よりもひどい回答だ、これは。

「……………」

野上の刺すような目線は依然おれを捉えたままだ。一体何が納得いかないんだ、野上は？

「……………に？」

「えっ？」

「本当に窓の鍵は閉まっていた？」

「ああ……もちろん本当だとも。どうして嘘をつく必要があるのかな」

なぜ彼女はそこまでしてそんなところにこだわるのだろうか。また手汗がじつとりと滲んでくる。

「犯人は窓から飛び降りたから」

野上が抑揚の無い声で言い放った。彼女の氷のように冷たいアルトが不気味な程によく響いた。

「さっきも言っただろ？ 四階から飛び降りる馬鹿が、どこに……」

「……雪」

「はっ？」

「ゆき」

「……雪がどうしたって？」

平生の態度を努めたが声がかすれてしまった。

「そつか！ 雪ね、忘れてた！」

手を叩いて言ったのは美並だった。

「そうよ、今日は一メートルも雪が積もってるじゃない。そんだけ積もってれば四階からだろうが、クッションになるから飛び降りも……」

「待て、待ってくれよ、いくらなんでも、それは」

「うっん、だってこれ以外に犯人が密室から出る方法なんてなさそうじゃないの」

「四階だぞ、ここは。いくら雪が積もっていたからって一メートルぼっちじゃ、大したクッションにもならないし、怪我もするだろう」

乾いた唇を舐めながら、おれは必死に飛び降り説を否定した。

「この高さだ、たった一メートル雪が積もっていたからなんだ。飛び降りる馬鹿がいるわけ……」

「そうかな」

言い切る前におれの発言は遮られた。

「お前は何か勘違いしてるな。確かにここは四階だよ。でもこの学校は坂の上に建っているんだぞ、忘れたのか？ つまりここから窓の下までの高さはせいぜい三階ほどしかない」

「それなら一メートルも積もってれば平気じゃない？ ねえ？」

おれはそれには答えず「どっちにしろ窓には鍵がかかっていたのだから同じ事だ」と、にべもなく吐き捨てた。

「だからこそ本当に窓の鍵が閉まっていたかどうかが問題なんだ。もう一度訊く、窓の鍵は確かに閉まっていたのか？」

「おれが嘘をついたと言うのか」

おれは彼をねめつけたが逆にこちらを憐れむように肩をすくめただけでのれんに腕押しであった。

「質問に答えろ、鍵は閉まっていたか？」

「何度も言わせるなよ。閉まっていたって言ってるだろう！」

「やれやれ。やはりお前が犯人だったのか」

さっき缶コーヒを飲んだばかりだというのに急激に口の中が渴いていくような感覚に襲われる。

おれが犯人だって？

「冗談だろ」

おれはぶつきらばうにそう返した。彼は軽いため息をつくと、

「冗談でこんな事は言わない」

「冗談にしか聞こえないね。どうしておれが犯人だと？」

「お前は自分に降りかからんとする火の粉を恐れるあまり、さらに大きなミスを犯したんだよ」

「何の事かわからんね。おれはただ窓の鍵はたしかに閉まっていたと言っただけだ」

「そこだよ」

一体こいつは何を言い出そうというんだ。おれが何か言ったのか。

「残念だが、この教室の窓は鍵が壊れていて閉まらないんだよ」

「えっ……」

おれは思わず窓にかけよっていた。鍵を確かめると確かに鍵は壊れていて、どうやっても鍵をかける事が出来なかった。

ストーブはきいているはずだったが、背筋は凍るように冷たかった。

「知っていたのか、お前は……鍵の事を、最初から……」

「おれはついさっきさ。でも、野上は最初から気がついていたと思うね」

そう言われても野上は相変わらず能面のような表情を変える事はなかった。

「そうさ、確かにおれは嘘をついていたよ。でもそれは密室のトリックが“窓から飛び降りた”なんてあまりにも陳腐で情けないオチになるのが嫌だっただけだ。おれが犯人だって？ そんな事があるはずないだろう」

すでに逃れられる望みは薄い気はする。

「おれを犯人呼ばわりしたかったら証拠を持ってこい」

「おれだって今の嘘でお前が犯人だと断定するつもりはないんだ。でも、お前がそこまでして飛び降り説を否定しようとするって事は、すなわちお前が窓から飛び降りた事を証明する証拠を残しているという可能性は高いとみていいんじゃないかと思ってな」

「そう思っのなら出してしろ」

頭に鈍い痛みを感じる。灯油臭いストーブがずっと点けっぱなしだからという理由だけではない事は明白だった。もうおれは落城寸前なのだ。ここまで追い詰められて探偵の追及を逃れた犯人をおれは知らなかった。

「お前の体操着を見せてしろ」

もういい……

「飛び降りて、雪がクッションとなって怪我は免れたとして、それによって服が濡れてしまう事は防げないだろう。けれど、お前の制服が濡れている様子はない」

ああ……

「もし何か別の事情で濡れていたんだったら納得のいく説明をしてくれよ？」

もはやそんな気分にはなれなかった。全てがどうでもよかった。

おれは西村に復讐できただけで十分だ。

彼が不慮の自転車事故で妹の足を奪った事は許しがたい事だった。本当は西村に悪気がない事も、落ち度がない事もわかっていた。飛び出した妹が悪い事は承知していた。

それでもおれは…… おれは……

「おい、内田、聞こえてるか？」

佐倉裕貴はそう言って、意気消沈としたおれの様子を伺った。

*

まず最初に一言言わせてくれ。ひでえオチだと。そしてこのオチに持ってくるまでのプロセスがあまりにも雑だ、手抜きだ。こんなふざけたおしたもんがミステリなんて……

「認めるよ」

内田が生気のコもっていない声でそう言った。正直な話、追い詰めたのはおれだがそんなにあっさり認めてしまっていていいのかと言いたい。

「おれが……おれが、西村を殺したんだ」

内田が搾り出すように言った。

まだ容疑者のアリバイがどうか（せっかく桐山が大体の死亡推定時刻の見当までつけてくれたのにだ）、凶器の毒薬は結局何だったのかとか、いくらでも考えるべき点は残っていたはずなのに。作者が飽きちゃったんだろうな。死ね。

「動機は結局なんだったんだ。」

動機が分からないまま物語が終わっても後味悪いから出来れば教えて欲しいんだが。

「やっぱり会誌の事か？ 会誌の出来に、嫉妬して……」
「そうじゃない」

内田はゆるゆると首を振ると

「会誌は関係ないんだ。関係ないからおれはその動機の事を持ち出したんだ」

「じゃあ、どうして……」

「それは……いや、もう、どうでもいい事だ」

内田は投げやりにそう言うのがつくりと項垂れる。

「彼の命を奪った毒薬はストリキニーネ。科学部に友だちがいてね。そいつがたった六回の工程でストリキニーネを合成してみせると最近意気揚々としてたもんだから記念にもらったんだ。奴も中々危ないとは思っけだな。思えばそいつがそんな馬鹿な事を言い出しさえしなければおれの中の悪意は爆発する事はなかったのかもしれない。おれはそれをただ、食堂で買ってきたパンに入れて食わせただけ。ほら、お前の分も買ってきてやったぞ、食えよ、ってな。ミステリみたいにすぐに効果が現れなくてヒヤヒヤしたが、ちゃんと教室で死んでくれてホッとしたよ。」

後は同じ毒薬を塗った睡眠薬の瓶を置いて、密室を作って窓から飛び降りただけだ。もちろん体操着は着てたけどな。誰にも見られなくてよかったよ」

「わざわざ拾いきれなかった謎を教えてくれてどうも」

「こんな投げやりなまとめ方もないと思うがな」

自嘲気味にそう言う「もう雪も止みそうだ」と呟いた。

警察が来るのはもう時間の問題だろう、彼は自首するそうだ。――応解決って事でいいのかな。

しかしひでえオチだ。

生意気に叙述トリックもどきまでやろうとするなんて作者には十年早いと言いたいね。

そう、妙に不自然に「*」で区切るなと思っていた事だろう。それも区切るようなタイミングではないところではかり区切っていたような気がする。しかしそれはおれと彼の視点が「*」ごとに切り替わっていたのだ。

前回の最初の視点が彼、次がおれ。といった感じに、前回から内田 おれ 内田 おれ 内田 今ここつてね。まあ、ある程度叙述トリック慣れしていれば前回を読んだだけで見抜けただろう。

いや叙述トリックと言えるのかどうかは怪しい。こんなのはただのペテンだとおれは思うよ。

そもそも今まではずっとこのおれの一人称一視点固定だったじゃないか。それをいきなり真犯人の視点で始められても読者にあまりにもアンフェアだ。そうだろう？ もうウンザリだ、こんなふざけた事に巻き込まれるのは。

もっとちゃんとした、読者が素直に「やられた！」と思う叙述トリックならまだしも、こんなお粗末な手段でしか意表をつけないようじゃ作者にミステリは百年早い。それが分かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8265w/>

お約束研究会

2011年11月27日12時47分発行